

# 教員養成における合奏授業の要点

今 井 治 人

Points of an ensemble class for a teacher

Haruto IMAI

## 要 旨

本論は、学校教育音楽科で行う合奏授業の学びの過程が、文部科学省中央審議会答申等で言及されている「資質・能力の3つの柱」に示された学力の要素を育てる有効性を持つことを示しながら、教員を目指す学生の合奏授業の実践力を身に付ける方法について、特に演奏技能の視点から検討する。まず、学校音楽教育の合奏授業と学校教育が求める学力との関連を探った後、その授業実践には「楽曲を再構成する力」「演奏力」「演奏技能の視点から教材化する力」の3つの力が必要であることを示し、これらの力を身に付ける方法について検討する。最後にこの3つの力を背景とした「演奏診断力」を提案し、これを構成する力として「演奏を聴く力」と教育内容や意図を伝える「言葉の力」について検討する。

【キーワード】 資質・能力の3つの柱、演奏技能、音の形、身体の制御

## 1. 教員養成における合奏授業の目標・目的

### 1.1. 合奏授業を指導する力とは

小学校・中学校・高等学校の学校音楽教育での合奏授業の実践方法について、現職教員の方々が私の研究室を研修のために来訪されることがある。お話を伺っていると、はじめ論点は指揮法についてであったのが、次第に合奏を指導する視点や指導に必要な演奏の状態を見極める方法などの、合奏指導の方法論全般についての論点へと変化していくことに気づかされる。この様な経験と並行して、教員養成学部音楽科で行う合奏授業の実施方法については、各大学の担当教員によるさまざまな工夫が繰り返され、議論が絶え間なく続けられている。この試行錯誤の根底には、次の問題意識があると考えている。それは、大学の合奏授業によって学生が教育現場に必要な実践力を身に付けているか、それと共に合奏授業が音楽を学ぶために必要な質を担保出来ているか。つまり、大学の合奏授業は、教員養成の目的と音楽の学びとのバランスが取れているか、という問題意識である。

そこで本論では、教員養成の目的を果たしつつ音楽を学ぶために必要な質を持つ合奏授業のあり方につ

いて、次期学習指導要領の審議の中で扱われている「資質・能力の3つの柱」を念頭に整理していく。これは初等中等教育で育成すべき学力の要素として示されており、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力・人間性等、の3つの柱で構成されている（中教審教育課程部会報告、2016）。教員養成課程の学生は、将来この3つの柱を踏まえた合奏授業の実践を求められる。そして、音楽の美しさや合奏の喜びを児童生徒に伝え、「音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽文化と豊かにかかわる資質・能力」（中教審答申、2016）の育成を目指していく。そのためには、児童生徒の興味や感性を音楽へ向かわせ、音楽的な見方、考え方を身に付させる必要がある。つまり、先述の学力の要素を育成すると共に、音楽の学びに必要な思考方法を伝える合奏授業を実践する力を教員養成課程の学生は身に付けなければならない。

この合奏授業の実践力を身に付けるには、学生自らも大学の授業のなかで音楽の学びの意味について常に問いかけることが必要になる。この姿勢を基盤として、楽器の知識や演奏技能、演奏を聴き適切な修正を提案するための演奏を聴く力やそれを伝えるための言葉の力、またその前提となる楽譜の内容を読み取る力など、これまで学んできたことやこれから習得する音楽の知識と技能を有機的に統合しなければならない。音楽的な能力を身に付けることを目標とし、合奏授業の実践力養成を目的とする教員養成における合奏授業の要点を「資質・能力の3つの柱」を念頭に置きながら明らかにしていく。

## 1.2. 学校音楽教育の合奏授業と学力

では、「資質・能力の3つの柱」と合奏授業はどのようなつながりを構築できるのであろうか。それを解明するために、合奏授業の学びの過程と、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力・人間性等、の3つの柱を対応させると以下のように考えられる。

- ① 知識・技能：教材に含まれる音楽の要素、聴く力、演奏の技能
- ② 思考力・判断力・表現力等：音楽の要素をより高い質で表現する力
- ③ 学に向かう力・人間性等：①と②を活用して、相互・互恵的に解決していく力

合奏によって培われる「知識・技能」の中心は、楽器についての知識と楽器を演奏する技能である。音楽理論の知識と関連する音楽の要素の理解は、音楽の学習全体を通じて深まるものであり、合奏授業もその一つの機会と言える。一方で、「思考力・判断力・表現力等」は、合奏による学びと密接に関連している。なぜなら、合奏という演奏形態における他者との協働は、テンポのずれ、和声の不純、強弱の不統一など音楽の質として後退している状態を生み出す場合もある。それらを①にある「聴く力」を基盤とした、「ふさわしい表現を考える力」、「表現にふさわしい方法を選択する判断力」、「それを表現する力（演奏力）」によって改善していくことが合奏授業の学びの過程である。その流れを支えるのが「学びに向かう力・人間性等」であり、音楽の質を向上させるために発揮される思考力・判断力・表現力を育てる学びとなる。

このように合奏授業は、音楽の要素についての知識や演奏の技能を土台として、他者の音を聴き、思考・判断・表現して音楽の質や演奏の質について考察し、それを繰り返す循環から成り立っている相互・互恵的な音楽の学びであり、「資質・能力の3つの柱」に示されている学力の要素を育てる学習となる。

## 1.3. 教員養成における合奏授業の目標・目的

これまでの検討により、学校教育で求められている学力の要素と合奏授業との関連は明らかになった。この結果を踏まえながら、次に教員養成における合奏授業の目標・目的について考えていく。この目標は学校音楽教育で行われる合奏授業の目標の達成のために設定されなければならない。そこで、小学校・中学校それぞれの学習指導要領等に示された関連する内容を整理する。

## (1) 学習指導要領等の合奏授業との関連

現行学習指導要領の小学校音楽の目標の頭書きには、「表現及び鑑賞の活動を通じて、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽文化と豊かにかかわる資質・能力を次の通り育成することを目指す。」と示され、1.1. で言及した「資質・能力の3つの柱」に対応するように3項目の目標が示されている。上記文中の「見方・考え方」については、中央教育審議会の「学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016）の「音楽科、芸術科（音楽）における見方・考え方」に以下のように記載がある。

### 【小学校音楽科】

音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること。

### 【中学校音楽科】

音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること。

具体的な記述の例として、現行の小学校学習指導要領の「第5学年及び第6学年」の「2 内容A 表現(2)」の器楽と関連する項目を見てみる。そこでは「器楽表現について知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲の特徴にふさわしい表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもつこと。」と記され、音楽の構造や楽器の音色と響きや演奏法との関連などについての理解、旋律楽器や打楽器を演奏する技能、そして「各声部の楽器の音や全体の響き、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能」を身に付けることとしている。

さらに「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」には配慮すべきこととして参考にすべき記述がある。その一つは、1(1)「～略～音楽の見方・考え方を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさなどを見いだしたりするなど、思考、判断し、表現する一連の過程を大切に学習の充実を図ること」、さらに、2(5)では、学年進行に伴う楽器の選択が示唆され、「オ 合奏で扱う楽器については、各声部の役割を生かした演奏ができるよう、楽器の特性を生かして選択すること」と述べられている。

## (2) 教員養成における合奏授業の目標・目的

これまで参考としてきた合奏授業の目標と関連があると思われる学習指導要領等の記述は、次の四つにまとめることができる。

- ・音楽を形づくっている要素とその働きにたいする知識とそれを活用する力身につける。
- ・楽器を演奏し合奏をするための知識と技能を身に付ける。
- ・思考・判断・表現の一連の過程を大切にする。
- ・楽器の扱いについての配慮

以上の四つを踏まえながら、「資質・能力の3つの柱」に含まれている学力の要素を育成することに適う教員養成における合奏授業の目的・目標・内容について検討する。

検討を始める前に念頭に置くべきは、小学校、中学校での授業実践と乖離したものにならないように配慮することである。特に、クラスの人数、児童生徒のこれまでの学習、楽器の演奏力を踏まえて教材を準備すべきである。教材の候補曲はクラスの状況に適応するかについて精査される必要がある。その結果教材として不適当の場合、教員は楽曲を再構成し教材化する作業に取り組む必要がある。ここで、クラスの

状況に合わせて「楽曲を再構成する力」が必要となる。児童生徒の演奏力や楽器の種類に配慮することは、児童生徒の学びに向かう力を減退させないためであり、思考・判断・表現の学習の過程を生かすことにつながる。難しすぎる教材は、1.2. で述べた合奏授業に特有の学びの過程に注意力が働かず、合奏で学ぶ意味を見失う。

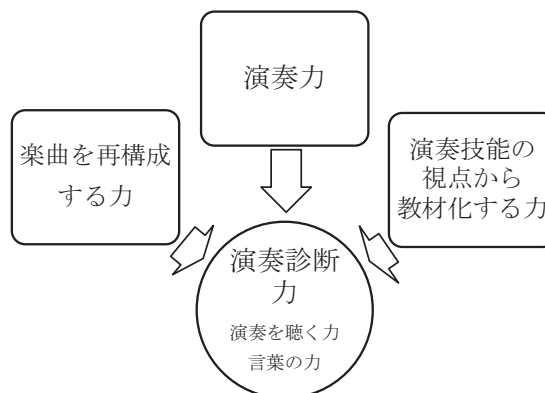
児童生徒の演奏力を超えている難しい教材は、演奏の持つ音楽の質に対する感性を減退させ、思考・判断・表現の学習の過程を活かすことができない。合奏で発揮される感性は、ゼロから新しいものを生み出すための感性ではなく、演奏の実態を把握しその状況をより音楽的に改善し、音楽の質の向上に関与する感性である。この感性を働かせるために、自らの演奏やアンサンブルの演奏を聴き取る力が必要である。聴き取る力を生かすには、演奏のための身体的活動に囚われすぎないことが大切である。聴き取る力が働けば、音楽を形づくっている音楽の要素やその働きを他者の演奏との関わり方から学ぶことができる。つまり、学習形態としての合奏の意味が担保される。

楽曲をクラスの状況に合った教材へ再構成した後、その楽曲を使った指導計画を作ることになる。そのために必要なことを本論では「演奏技能の視点から教材化する力」としたい。なぜなら合奏を通じた音楽の要素やその働きにたいする理解と定着を目指すには、楽器を演奏する身体的な感覚を伴わせることが重要だからである。これにより音楽の要素と演奏技能の要素を重ね合わせた理解と定着をめざす。例えば、弱音と強音を演奏したときの音の変化とそれに伴う身体的変化を理解できれば、音楽の要素を楽譜上の記号論としてではなく、楽器を演奏する活動を通じた理解となる。ここで、この指導には模範演奏を示すための「演奏力」が必要である。

ここまでの検討を通じて次の3つの力が必要であることが分かった。

- ・楽曲を再構成する力
- ・演奏技能の視点から教材化する力
- ・演奏力

上記の3つの力は、授業の前に用意できることである。合奏授業を展開するときには起きていることは、児童生徒の演奏を聴き取り、改善点を見つけ、演奏の質の向上へ向けて適切なアドバイスを与える活動である。そのとき必要とされる力を本論では、「演奏を聴く力」と有効なアドバイスを与える「言葉の力」で構成される「演奏診断力」としたい。この力の背景には「楽曲を再構成する力」「演奏力」「演奏技能の視点から教材化する力」があり、これまで繰り返し取り上げた「資質・能力の3つの柱」の「思考力・判断力・表現力等」を育成する学習過程を作り出していく役割も果たしている。「演奏を聴く力」は音楽の要素や演奏技能の要素の働きの質を聴き取る力を指し、音に対する感度を高くし教材化した際の目的がどのように理解され演奏されているかを聴き取らなければならない。その結果を踏まえ、有効な言葉を選び、





指導の目的や意図を伝えていくのが「言葉の力」である。

これまでの検討で、教員養成における合奏授業の目標は、先述の3つの力とそれらを集約した「演奏診断力」であることが明らかになった。そし合奏授業の目的は、これらの力の育成を通じた確かな指導力を身に付けることである。

## 2. 合奏指導力の開発

### 2.1. 楽曲を再構成する。

これまでの検討で明らかになった合奏授業の指導力の一つである「楽曲を再構成する力」とは、楽曲を想定される授業環境に合わせた形へ改良する力である。もちろんこの作業は、学習指導要領の共通事項等の内容への配慮も必要とされる。ここでの授業環境とは、使用できる楽器と、それらの楽器に対する児童生徒の演奏力を踏まえたクラス構成を指している。

学校音楽教育で使うことができる楽器の種類は限られている。加えて、児童生徒自身が音楽の学びに良い効果を生むための高度な演奏技能を持つ楽器の種類はさらに限られてくる。楽器を使用する学習では、児童生徒が演奏方法の変化による音や音楽の質の違いを聴き取ったり感じ取ったりすることが欠かせない。音や音楽の質あるいはその変化について考えるためには素材となる音が必要であるが、この音を出せるようになるために特別な訓練が必要な楽器、例えば、ヴァイオリンなどの弦楽器や発音機構の複雑な管楽器などを授業で扱うのは難しい。なぜなら、演奏実践を通じた学習では、音を出すための身体動作が単純なものを選んで楽器を演奏することの負担感を少なくして、児童生徒の注意力が音や音楽に向けられるようにすべきだからである。

この条件を満たす楽器として、旋律楽器と伴奏楽器の二つの役割を果たせるマリンバやシロフォン、学校教育で継続的に学ぶ旋律楽器のリコーダー、旋律だけでなく和音を演奏できる鍵盤ハーモニカ、リズムを補強したり楽曲のローカリズムを連想させたりできる各種の打楽器などが考えられる。これらの楽器を使い、児童生徒の演奏能力へ配慮しながら既成曲の再構成を行う。その際、これまでの議論に加えて次の二点を留意事項として含むべきである。

- ① 共通事項と関連付けられる内容を合奏の特徴である他者との関わりのなかから学べること。
- ② 演奏実践を通じて音楽の要素とその働きを体験的に理解するために、演奏技能に着目できる内容を持つこと。

上記①は、合奏を通じて音楽を学ぶことを忘れないためである。和声のこと、リズムの重なり方、それらを含む伴奏と旋律の関係、さらには、二つや三つの旋律が同時に進行しながら和声をも作り出すポリフォニーの形式など、合奏には音楽の要素がいっぱい詰まっている。上記②にある「演奏の技能」については2.2. で詳細を述べるが、上記の二点は、児童生徒の注意が演奏能力に偏らないように配慮した楽曲の再構成を成功させる鍵となる。つまり、音楽の要素を有機的な働きとして理解することを可能とし、音楽の要素とその働きを音楽的な意味として発見することになるだろう。

以上を踏まえた「楽曲を再構成する」ための方法を整理する。

- ・ 使用楽器の音域を確認し楽曲全体の声部がなるべく入れ替わらないようにする。
- ・ 難しいパッセージは簡略する（旋律の骨組みや和声の骨組みを残す）。
- ・ 原曲のイメージを損なわないような楽器の選択をする。
- ・ 状況に合わせたパート譜を作る（複数の楽器を担当する場合は演奏者ごとに対応したパート譜）。

## 2.2. 演奏力を育てる

児童生徒が最も直感的な学びをするのが指導教員の模範演奏からである。その意味で演奏力を育てることは非常に大切である。演奏力の高い模範演奏は、音楽の知識が有機的な意味や情意的な意味を持っていることを示す。

「演奏力を育てる」と言っても、難しいパッセージを弾きこなせるように育成するのではない。教材として取り上げた楽曲にはさまざまな音楽の要素が含まれている。それらの音楽の要素をそれぞれにふさわしい「音の形」で表現できるよう、演奏技能を身に付けることが目標となる。演奏技能の基本は、さまざまな「音の形」を楽器から作り出す力である。「音の形」をそれぞれの明確な違いをもって演奏できたなら、その演奏の表現力は強い説得力を備えている。「音の形」は、1.3. で触れた、「学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016）のなかの、「音楽科、芸術科（音楽）における見方・考え方」で示されている内容を具体的な活動にするときの鍵となる。「見方・考え方」では、小学校、中学校にかかわらず「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉える」ことが重視されている。合奏の授業は楽器の演奏を通じた音楽の学びである。楽譜の上での記号論的な音楽理解でもなく、鑑賞のような演奏を聴きくことを通じた理解でもない。演奏は、「必要とされる音をイメージする→音を出す→その音を聴き評価する→イメージに近づけるための方法を考える」という、自らが出している音と向き合い考察を進める循環形の学びの循環を持っている。「音の形」は音楽を形づくる要素の根源であり、「音楽に対する感性」には、「音の形」に対する感性も当然含んでいる。「音楽に対する感性」は、先述した演奏の学びの循環のなかの、「必要とされる音をイメージする」とき、「音を聴き評価する」とき、さらに「イメージに近づける方法を考える」段階で発揮されている。演奏力を身に付けるには、「音楽に対する感性」を働かせ、演奏に必要な技能を通じて音の形を捉えていかなければならない。このように、演奏力を高めることは、「音楽に対する見方、考え方」と強い結びつきを持っている。

演奏力を育てる方法について、各種楽器に共通と思われる基本的な考え方を整理する。

### ① テキストは必ず使用する。

取り上げている音楽の要素（初心者の場合のリズム形の場合でも）を楽譜から知ること、その時のトレーニングの目的を明確にできる。聞き覚えたことをまねるようなことはしないこと。楽譜に落とし込まれたさまざまな音楽的な発想を読み取る訓練にもなる。

### ② 身体の制御について理解する。

楽器演奏の身体の動作に注目させ、構え方や演奏中の動きを理解する。音を出し始めると音を出しやすい構え方に引っ張られるが、それが学習を進めるうえでふさわしい構え方であることは稀である。初めは音を出しにくいかもしれない。しかし演奏中は正しい構え方を守ること。教授するときの模範の構え方や映像を見ながら、構え方のイメージを持たせることが大事である。構え方の癖や演奏中の姿勢の不自然さを本人はなかなか気が付かない。構え方や演奏中の姿勢の確認には、学習者相互に検証することや、録画による検証、あるいは鏡を見ながらの練習が有効である。自身の動きを外部の評価を通して理解することは、頭の中にあるイメージと実際の行動との差異を埋めることになる。特に鏡を見ながらの練習は、頭にあるイメージと身体の動作を関連させるために大変役立つ。学生は、無駄な動きを省くことで、効率の良いかつ美しい構え方や演奏中の姿勢を獲得できる。このような身体の制御について着目することで、演奏力は飛躍的に向上する。

### ③ 楽器の仕組みに対応する発音の方法を理解する。

身体の動きを効率よく楽器に作用させるために、楽器の仕組みと発音時の身体の状態を関連させて捉

えることで、良い演奏の技能を身に付けることができる。これは「音楽に対する感性」の基盤となる「音を聴く力」を育てることも目指している。ここで大切なのは、楽器を演奏する能力が演奏者の生まれつきの資質や適正だけで評価されるのではなく、楽器の発音の仕組みを理解しそれに対応する技能を正しい訓練を行えば得られることを知る点にある。このことは、学校教育の実践においても大切な考え方である。

④ アーティキュレーションやリズム形に注目させ、音の持続の仕方について理解する。

テキストに含まれる音の形やリズム形を取り出して、短い音や長い音のそれぞれに対応する身体の動作について考察する。このときテンポは必ず設定すること。さらに取り組みやすいテンポだけでなく、それより遅いテンポや速いテンポにも取り組む。演奏者は自身の外にある時間軸に演奏技能を適応させることになり、身体の制御の仕方をさらに理解させることができる。音楽はリズム形が同じでもテンポの違いによる演奏方法の変化が求められる。この違うテンポでの練習は、演奏技能を身体の制御の視点から分析する力が身に付く。

⑤ 発音の前に用意される運指

楽器によって運指の方法は全く違う。そこに共通点を見つけ出すことは難しい。しかし一つだけ共通の考え方がある。当然であるが発音と運指が同時に行われては音程を作ることはできない。息が吹き込まれる前や弦が振動を起こす前に運指による音程の準備がされるのが演奏の実態である。そうでないと純度の高い発音はできない。演奏は時間の流れのなかでなされるため、音程の準備は発音と同時のように考えがちである。しかし、音程を作る運指は発音の前に必ず用意される。

以上の事項のうち②③④⑤に対する評価を行うときは、演奏された「音の形」の質や音楽の質を問わなければならない。演奏力向上の目的が「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉える」ことに寄与するためだからである。音楽的な意味を伝える「音の形」や音楽を表現することができてこそ、高い演奏力を身に付けたことになる。

### 2.3. 演奏技能の視点からの教材化

再構成した楽曲や既成の楽曲を授業で扱うには、楽典や作曲理論の知識に基づき教材としての内容を抽出したり分析したりしなければならない。それに加えて本論では、演奏技能の視点から教材を研究することを提案してきている。そのためには、音楽の要素を演奏技能の実際と結び付けていく発想力が求められる。言い換えれば、表現に相応しい演奏技能を選択する力が必要であるとも言える。記号化されて楽譜に定着している音楽の要素の音楽的意味は、演奏を通じた音響化によって初めて表現として実現される。音楽の要素にはそれぞれにふさわしい「音の形」があることはこれまで述べてきた。しかし「音の形」の選択によっては、その音楽の要素が持つ意味が変わる可能性を含んでいる。シンコペーションのリズムを例に採ってみる。このリズムは、裏拍の音を長めにとりながら、引きずるように演奏すれば音楽の流れを重く感じさせることができ、それとは逆に、音を短く弾むように演奏すれば音楽の流れを前進性のあるものに感じさせることができるであろう。このように演奏の方法の違い、別の言い方をすれば表現のための演奏技能の選択の違いと音楽の要素との組み合わせで、音楽の表現内容が変化していくことがある。演奏技能に関連した内容を教材から抽出し授業構成に活かせば、合奏授業が音楽の豊かな時間となり、「音楽に対する感性」を育てることにつながる。

演奏技能の視点から楽譜を読み解く力を身に付けるには、バロック期以前の楽曲を使うと良い訓練になる。当時の楽譜は演奏者でもある作曲者のメモ書きのように楽譜が書かれている。強弱、アクセント、テンポ指示、音の形や音のグループを示すアーティキュレーション、更には演奏する楽器の指定すらない楽

曲もある。演奏する奏者は、表現に必要な演奏方法の多くを当時の演奏習慣や音楽的教養から取捨選択して演奏を構成していた。つまり、バロック期以前の楽譜は演奏者の自由裁量の幅が大きい道標の形で存在していた。一方で、細かい指示の書き込みが増えてくる古典派以降の楽譜は、次第に演奏のための楽譜へと変化をはじめ、演奏者の解釈を以前より限定的なものにしている。

例えば、八分音符が四つあれば、一つ一つを独立させて、一つと三つに分けて、以下、二つと二つ、三つと一つ、などのようなまとまり（アーティキュレーション）を作りながら演奏する選択が可能であり、それぞれのアーティキュレーションが持っている表情を理解して演奏に結び付ける訓練ができる。更に掘り下げれば、選択したアーティキュレーションが、「鍵盤ハーモニカには相応しいがアルトリコーダーには相応しくない」などの楽器を通じた表情の違いにも考察の対象が広がる可能性を含んでいる。この訓練を繰り返すことは、音楽の要素や「音の形」、それに対応させる演奏技能、そして使用している楽器の3つの視点から、楽曲を豊かな表現で彩る方法を学んでいくことができる。演奏方法の指示の多い楽譜のみに接していると、演奏技能の選択から生まれる音楽の要素の表情の違いを捉える力が育たない。音に対する能動的な取り組みからこそ音楽的な指導力を獲得できる。

これまでの考察で明らかになった「演奏技能の視点から教材化する力」を身に付けるための方法を、楽譜の分析から始める手順として整理しておく。

- ① 音楽の要素を見つけ出す。
- ② 音楽の要素の楽曲のなかでの音楽的意味について把握する。
- ③ その意味を表現するための演奏技能を選択する。
- ④ 演奏実践により演奏技能の適合や不適合について評価し、別の可能性についても考察する。

### 3. 演奏診断力

#### 3.1. 演奏診断力

本論はこれまで、合奏授業を指導する力を身に付けるための教員養成課程における合奏授業のあり方について考察を進めてきた。そこでは「楽曲を再構成する力」「演奏力」「演奏技能の視点から教材化する力」の3つの力の必要性を示し、それぞれの内容について検討した。ここからの考察対象である「演奏診断力」は、先述した3つの合奏授業に必要な力を背景として、「演奏を聴く力」と指導内容を伝える「言葉の力」加えたものである。合奏授業では、児童生徒の演奏の成果について評価し、改善点を指摘し、次への取り組みへ導くための表現方法が重要なのは言うまでもない。「演奏診断力」とは、まさにその時発揮されなければならない。

「演奏診断力」の対象となる学校音楽教育の合奏授業が、理解の目標とする音楽の内容をこれまでの議論を踏まえながら整理すると以下ようになる。

- ① 教材に含まれる音楽の要素とその働きの理解と定着を目指す。
- ② 表現の技能の理解と定着を目指す。
- ③ 相互、互恵的な学びを通じて、以下のような合奏特有の音楽リテラシーの獲得を目指す。
- ④ リズムの縦構造からの理解
- ⑤ ハーモニーをその構成の一部となることからの理解
- ⑥ ダイナミクスの変化の理解（編成の変化に伴うもの）

合奏指導では、以上の内容を指導の視点として、これらの定着を目指して演奏診断をする。

ここで確認したいのは、学校音楽教育の合奏授業に参加している児童生徒の音楽学習の経験の違いにつ



いてである。「演奏診断力」はそれぞれの意欲や動機を刺激し学習に向かわせるための力でもある。

＊児童生徒の音楽学習歴

- ・受動的未習得者
- ・能動的未習得者
- ・能動的習得者
- ・生得的習得者

ここでの「生得的習得者」とは、音楽に対する生まれながらの資質による音楽理解が学習経験によるものよりも優位にある者を指している。加えて「能動的習得者」とは積極的な学びにより音楽理解を得ている者、「能動的未習得者」とは積極的な学びをしているがまだ目標とする音楽理解に達していない者、「受動的未習得者」とは音楽の学びについて消極的であり、目標とする音楽理解に達していない者をそれぞれ指している。これらの多様な児童生徒へ「演奏診断力」を発揮しながら授業を行うことになる。

### 3.2. 演奏を聴く力

「演奏診断力」のなかの「演奏を聴く力」は、さらに2つのことを含んでいる。ひとつは「演奏を音響的素材として聴く力」である。これは、「楽曲を再構成する力」「演奏力」「演奏技能の視点から教材化する力」の3つの力を育てることで身に付いていくが、一般的なソルフェージュの力とは違うことを理解したい。対象としている楽曲は授業準備の中で熟知したものになっているはずである。つまり、ソルフェージュの訓練にある「初見」の要素はなく、音楽の要素の項目的内容や演奏による「音の形」についてのイメージ形成がなされている状態と言える。教師の「演奏を聴く力」を支えるのは、この楽曲が演奏されることによって生まれる音響的イメージの形成である。これが十分出来ていれば、音程の違や「音の形」を評価することへの対応力も上がってくるだろう。このように、「演奏を聴く」とは、対象の演奏の情意的な内容よりも「音の形」や演奏技能の視点から聴くことを指している。

もうひとつは「児童生徒の演奏をいくつかの集合単位で聴く力」である。児童生徒の音楽学習に対する積極性を生み出すには、教材の内容を大切にすることはもちろん、それぞれの児童生徒の演奏に耳を傾けていくこと、そしてその姿勢を伝えることである。合奏指導では、1つのパートを複数の人数で担当しているときはパートごとに、そして必要なら個人ごとに演奏を聴くことが求められる。この力を身に付けるには、事前の授業準備といくらかの経験を必要としている。全体の演奏から個別のパートを抽出して聴き取る訓練としては、全体が示された楽譜（総譜）の中から一つのパートを選び、そのパートを視覚的に追いつながり聴く。これは視覚による認知と聴覚による認知を組み合わせることで聴取力を高めていく訓練である。それと同時に楽譜を見ないで全体を聴くことも行うべきである。視覚の助けを借りることで聴くべき対象が明確になるが、この副作用として全体像をつかむ聴取力の向上が進まなくなる。両方の聴き方を意識しながら取り入れることで、演奏全体を聴き取る力と個別のパートを聴き取る力の両方を身に付けていくことが大切である。これらの方法をより効果的にするには、授業準備のときに各パートや複数のパートをピアノで弾くのも有効である。

### 3.3. 指導内容を伝える「言葉の力」

「演奏を聴く力」は、指導内容を適切に把握するために欠かせないものである。そして次に求められるのは、良かった点や改善点を伝えるための指導者の「言葉の力」である。音楽を言葉で表現することの難しさは今更言うまでもない。しかし演奏指導で使われる言葉としては2つの傾向がある。ひとつは「物理的な表現」による言葉、もうひとつは児童生徒の「共感性を期待した表現」である。

「物理的な表現」とは、遅い・速い、高い・低い、長い・短い、大きい・小さい、強く・弱く、四角い・丸い、などの端的な言葉を指している。これらの言葉に「少し」や「もっと」などの増減に関する形容を加えればさらに表現する範囲が広がる。これらの語彙は、速度や時間の経緯、空間性や強弱などの物理現象として音楽を捉えていて、明確な指示として児童生徒に伝わる。これと反対に曖昧な言葉で指導を続けると、指導に具体性が見えなくなり目標までもが曖昧になってくる。

しかし音楽は多くの曖昧な要素を含み、だからこそ表現の多様性を生み出している。指導に情意的な面が加わるとなおさらである。演奏の一回性の価値はここにあり、児童生徒の演奏の多様性の存在価値も同様である。この曖昧さを指導に落とし込むための言葉の力として必要なのが「共感性を期待した表現」と考えられる。3.1. で示した「授業にいる児童生徒の音楽学習歴」に見られた授業に対する積極性やこれまでの音楽経験の違いは、「共感」する傾向にも違いが出てくる。先述した端的な表現では興味が示せなかった、あるいは理解できなかった児童生徒が、自分の「共感する力」を刺激されることで、音楽学習への積極性を獲得することもある。児童生徒が音楽のどの要素に興味を持つかはそれぞれの「音楽に対する感性」に頼っている。そのために指導者は、共感性を利用した表現を取り入れることで、音楽のいろいろな内容に興味を向けさせる可能性を手に入れる。「のように」で表される比喩の対象には、他分野の芸術作品、小説や歴史からの物語、物の手触り、自然描写など何でもなり得る。しかし教室にいる児童生徒の年齢や社会性を考慮しない表現は、共感を得ることが出来ず不適切なものになる危険性がある。注意深く上手に言葉を選ぶことに成功すれば、音楽の授業が日々の生活や社会のなかにある出来事とつながり、音楽の捉え方が広がりを持ち始める。これは「音楽科、芸術科（音楽）における見方・考え方」（中央教育審議会2016）の考えとも符合するものである。

#### 4. ま と め

本論では、教員養成課程の学生が合奏授業を指導する力を身に付けるつけるために何が必要かを検討してきた。学校音楽教育の合奏授業と学校教育が求める学力との関連を探り、その上に合奏授業の目標・目的を設定し、その指導のために必要とされる「楽曲を再構成する力」「演奏力」「演奏技能の視点から教材化する力」の3つの力を提案した。引き続きこれらの力を身に付ける方法について検討に入り、3つの力を集約する形として「演奏診断力」を合奏指導に必要な力として示し、そこに含まれる「演奏を聴く力」と「教育内容を伝える言葉の力」について検討した。

本論は、私の教育活動と音楽活動における研究を重ね合わせながら検討を進めてきた。さらに多くのことを検討の対象としなければ、教員養成課程の合奏授業の場面で起きている諸問題を汲みつくせないのは自明である。しかし、「資質、能力の3つの柱」に示された学力の要素を育てるために、学校音楽教育における合奏授業の学びの過程が有効であることを示せたのは有意義であった。加えて、教職を目指す学生自らの「資質、能力の3つの柱」に示された学力を育てる場として、合奏授業指導力を育成する過程があることも明らかである。

#### 参考文献

- 小学校学習指導要領（2008 文部科学省）
- 中学校学習指導要領（2008 文部科学省）
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程審議会（2016）「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議まとめ（報告）」
- 中央教育審議会（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等

について（答申）」

松下 佳代（2016）『資質・能力の新たな枠組み－「3・3・1モデル」の提案－』京都大学高等教育研究第22号

ペドロ・デ・アルカンタラ（2009）『音楽家のためのアレクサンダー・テクニーク入門』（小野ひとみ監訳、今田匡彦訳）春秋社

エリック・ブース（2016）『ティーチング・アーティスト－音楽の世界に導く職業－』（久保田慶一監訳、大島路子・大類朋美訳）水曜社